

信州こもろ風景遍路

ルート② みまきがはら 御牧ヶ原

空と丘と森の詩



いちご平



小諸の町から御牧ヶ原にあがると、何やら空気や光が違って見えます。時間の流れも違います。雄大な山々に囲まれ丘と池と森からなる田園風景は、春は野の花にあふれ、夏は緑輝き、秋は五色に色づき、冬は雪山が輝きます。たづね道に迷うかもしれませんが、もし迷った先ですてきな風景に出会ったとしたら、それは御牧ヶ原の妖精のしわざです。・・ Good Luck!



丘の上の大樹 めぐる四季。御牧ヶ原にみたのは、高原の静謐(せいひつ)な叙情をして祈り。ヨーロッパや富良野を想わせる空と大地の風景が広がります。



①御牧ヶ原の溜池群 暮雨(かう)の台地に、先人が豊かな稲田を夢みて営々と築きあげたため池は数百ともいわれています。流れゆく雲、光る水面が先人の心を今に伝えます。

山並み眺望コース (一周2.2km・約50分)
 駐車場→(丘の道)→沢への分岐→(沢の道)→沢の池→小さな集落→眺望の丘→駐車場
 ぐるり360°北アルプスや信州の雄大な山並みを見渡せる丘と、静かな沢の道をめぐるコースです。丘に広がる馬鈴薯や小麦の畑、森に囲まれた沢田の美しさを魅力です。



③丘の道 清澄な大気、のびやかなに広がる丘と森は、はるかに浅間の残雪を光る……。



④白い道 古代、朝廷の直轄牧場が置かれていたという「御牧」の地名。この高燥台地に開墾の跡(すき)・鎌(くわ)が入ったのは明治初期。豊穡の大地につく白い道、農の道ははるか丘を越えて続きます。



悠久の大地 朝まだき。ひとの本日の営為はまだもやの中に眠っています。



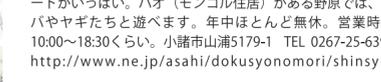
森・林
 ● ため池 ー 用水
 ● おすすめコース
 ● サブコース
 ▲ 眺めのいい場所
 ● 目印の木
 ● その他
 ● 店、喫茶店等
 ● バス停
 ● 人家(コース周辺)
 P 無料駐車場



雪晴れの朝



小諸市街地、戻り橋に至る



茶房 読書の森 喫茶と軽食の店。御牧ヶ原散策の情報を聞いたり、資料などが見られます。文学・くつろぎ・アートがいっぱい。パオ(モンゴル住居)がある野原では、ロバやヤギたちと遊べます。年中ほとんど無休。営業時間 10:00~18:30くらい。小諸市山浦5179-1 TEL 0267-25-6393 http://www.ne.jp/asahi/dokusyonomori/shinsyu/



丘のブランコ 遠い日、近くの森に住む小さな女の子のために、松の木のおじさんが懸けてくれた丘のブランコ。大人たちもそっと揺らしていきま。



御牧ヶ原公民館 森の中のT字路の、つぼの火の耳標があたりを見守っている公民館。ゆつたりと流れる時間、日に数往復、街から小さなバスがやります。



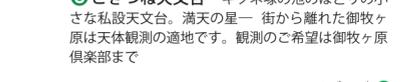
ベーカーリー&カフェ コッパー 浅間連峰が一望のテラスでお茶が飲める。絶景カフェ。焼きたてパンが自慢。7月中旬~8月中旬は、ブルーベリーの摘み取りもできます。休業日不定期。営業時間 10:00~16:00 小諸市山浦5374-131 TEL0267-24-1320



台地の端からの眺望 御牧ヶ原へ登る道はいくつもありますが、ここからの眺望が一番雄大です。



こぎつね天文台 キツネ塚の池のほとりの小さな私設天文台。満天の星一街から離れた御牧ヶ原は天体観測の適地です。観測のご希望は御牧ヶ原倶楽部まで



丘のブランコ 遠い日、近くの森に住む小さな女の子のために、松の木のおじさんが懸けてくれた丘のブランコ。大人たちもそっと揺らしていきま。



御牧ヶ原公民館 森の中のT字路の、つぼの火の耳標があたりを見守っている公民館。ゆつたりと流れる時間、日に数往復、街から小さなバスがやります。



ベーカーリー&カフェ コッパー 浅間連峰が一望のテラスでお茶が飲める。絶景カフェ。焼きたてパンが自慢。7月中旬~8月中旬は、ブルーベリーの摘み取りもできます。休業日不定期。営業時間 10:00~16:00 小諸市山浦5374-131 TEL0267-24-1320

小諸・御牧ヶ原の昆虫たち

~海野和男さん『小諸日記』(ホームページ)より
<http://eco.goo.ne.jp/nature/unno>

御牧ヶ原の生態系の豊かさに引かれて、アトリエを構えた、世界的な昆虫写真家のホームページより。



花を食べるヤブキリ 2009年8年1日



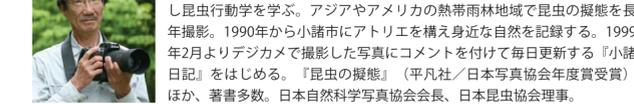
オオムラサキ 2005年7月2日 小諸市 今年もオオムラサキが活動をはじめた。オオムラサキは雑木林を代表するチョウで、樹液を出すクヌギやコナラの木と、幼虫の食べるエノキの存在が不可欠だ。大型のチョウで、行動範囲はかなり広いからある程度の広さの林がないと息が難しい。



カタクリとヒメギフチョウ 2008年4月14日



ハグロトンボ 2005年7月16日



海野和男 (うのかずお) 1947年、東京で生まれ。昆虫を中心とする自然写真家。日高敏隆氏に師事し昆虫行動学を学ぶ。アジアやアメリカの熱帯雨林地域で昆虫の擬態を長年撮影。1990年から小諸市にアトリエを構え身近な自然を記録する。1999年2月よりデジカメで撮影した写真にコメントを付けて毎日更新する『小諸日記』をはじめ。『昆虫の擬態』(平凡社/日本写真協会年度賞受賞)ほか、著書多数。日本自然科学写真協会会長、日本昆虫協会理事。



発行: NPO法人小諸町並み研究会 2010年3月
 〒384-0025 長野県小諸市相生町2-2-1 ☎0267-22-2227
 E-mail: info@machinami.komoro.org

編集: 御牧ヶ原倶楽部 (茶房 読書の森)内 ☎0267-25-6393
 E-mail: kp2y-yd@asahi-net.or.jp

一美し御牧ヶ原大地一

文 依田 素行(茶房 読書の森) 絵 矢嶋 玲 (御牧ヶ原在住画家)

第一章 御牧の風光

空に近い高原

信州小諸は浅間の連峰の、広大な南山麓の一角にひなたぼっこするようになっている高原の町です。その浅間山麓のつきた所に千曲川が流れていますが、その南西側に差し渡し六、七キロメートル、標高七百八十八メートルほどの平らかな御牧ヶ原台地があります。この台地は蓼科山麓から北に下って来た鹿曲川の大きな沢に二分された台地の東半分にあたります。その西半分は八重原台地、この双子の台地のうち、御牧ヶ原台地は地形的に完全に四方から孤立したテールランド状の高原であるという点が全国的にも珍しく、また独特の風光をもたらししている所以です。ですから、この台地上つってくるには、どの道を選ぶにせよ、急な山道を登ってくる事になります。上つていった先はどんなだろうという思いは初めてこの台地上つて来た方達に共通のものようです。その上りきった地点で突然三百六十度のパノラマの展望が開ける驚きがある、この台地を訪れる度(旅)ごとの大きな喜びになります。前景をなす美ヶ原の遙か北西に、半透明に浮かび上がる北アルプスの連峰が聳え立ち、南面するに円いドーム形の蓼科山とその奥つ方に八ヶ岳の連山。東に佐久の山塊、北の全面に浅間連山がそそり立っています。また、台地東北側の際に立ちます

第二章 御牧の歴史

生ける風景

御牧ヶ原は、その名が示す通り、はるか奈良・平安朝の時代には、朝廷に献上する馬の牧場でした。信濃の國には十六の官營の牧場がおかれ、このうち最大のものがこの御牧ヶ原に置かれた望月の牧場でした。現在もこの御牧ヶ原を中心に「御馬寄」「駒寄せ」など馬に関わる地名が多く残っており、牧場経営が盛んだった遠い往時を偲ぶことができます。遺構として今にわずかに「野馬除け」と言われる逃散を防ぐためと思われる柵跡が二カ所ほど残っています。また当時、大陸から騎馬・遊牧を得意とする人々を招き、牧場指導に当たられたので、「高良社」(佐久市浅科)など大陸系の古神社も付近に散在しています。この台地の上を渡来人始め人々

詩の丘と森

第三章 御牧の小さき生き物達

特別寄稿 海野和男(昆虫写真家)

御牧とぼく

生まれ育った東京に家を持つことなどがないそうもないというバブルに日本がおぼれていた頃だ。小諸の近くを通りかかったら「売り出し中」という看板を見つけた。看板に誘われるようにして行き着いたのが御牧ヶ原の一角だった。

別荘地として売り出し中の物件だった。気に入った土地にはミヤマクワガタの大顎が落ちたのである。フクロウに食べられたのである。ミヤマクワガタがいて、フクロウもいる。豊かな自然がある証拠だ。その場で購入を決め、すぐに家を建てた。それから二十年以上の歳月がたった。家の外に出れば、そこにはフィールドがある。一九九九年にインターネットで小諸日記をはじめた。これは今というブログのようなもので、

第四章 御牧の繪画

小山敬三夫婦の戦中・戦後

近年、小諸の生んだ特筆すべき画家の一人として、まず小山敬三の名を挙げることでできます。その小山敬三は御牧ヶ原に縁が深く、太平洋戦争時とその後しばらく御牧ヶ原に疎開していました。その当時、仏蘭西人の奥様と農作業に勤しみながらも時に二人で乗馬もし、仏蘭西人の奥様がその夫を「ケイゾー、ケイゾー」と呼び捨てにしていたのが、珍しかったとは、当時を知る年配の方の貴重な証言です。

「小諸から千曲川を越えた御牧ヶ原に居を構えた。(中略)戦争が終わったら「絵どころの話」ではなからう」と思い、この御牧ヶ原で半農半画の

第五章 御牧の詩

野原

依田素行うりい

春の野に立つ
ようやくに
冬の凍てつきが融けて
ぬかるみ、
足跡が台地に沈む地は
緑の帷子をば
うち敷いたかのよう
色づく
日と地は巡り来たり
再び新しい



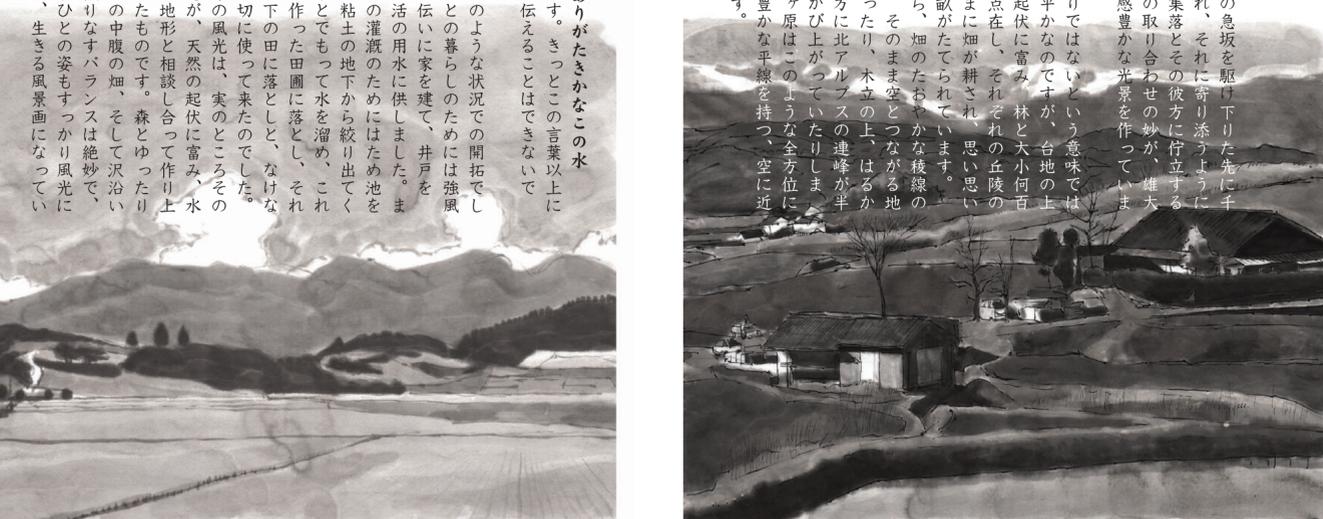
第六章 御牧の歌・文学今昔

小室節考

御牧ヶ原の有史時代は奈良・平安時代に官牧が設置されたときに始まります。その時大陸から馬の飼育・馴致を事とする専門家を招いて指導に当たられたのですが、その彼らがその故郷の草原や遙かな山並みに思いを馳せて歌った歌が小室節になりました。小室節は小諸馬子歌・小諸追分節の本歌です。その小諸追分節が全国の追分節の本歌になって、全国に広がりました。つまりは大陸からの渡来人がこの御牧で歌った歌が、小室節始め全国の追分節という形になって伝承していったわけですから、その長々と、緊張を持つてうねる旋律は、確かに古代

特の風光をもたらししている所以です。ですから、この台地上つてくるには、どの道を選ぶにせよ、急な山道を登ってくる事になります。上つていった先はどんなだろうという思いは初めてこの台地上つて来た方達に共通のものようです。その上りきった地点で突然三百六十度のパノラマの展望が開ける驚きがある、この台地を訪れる度(旅)ごとの大きな喜びになります。前景をなす美ヶ原の遙か北西に、半透明に浮かび上がる北アルプスの連峰が聳え立ち、南面するに円いドーム形の蓼科山とその奥つ方に八ヶ岳の連山。東に佐久の山塊、北の全面に浅間連山がそそり立っています。また、台地東北側の際に立ちます

が騎乗疾駆していた姿を想像しては古代にロマンを馳せることができます。その高原を散策する愉しみの一つです。しかしその時代も過ぎると、水に恵まれないため、永らく無人の原野と化してしまいました。明治三年に至つて本格的な開拓が始まりました。小諸藩家老だった鳥居義処の藩士、御用達層による第一次の開拓で、干害との苦しい戦いが長く続きます。水利に関する難題がようやく解決をみたのは、昭和四十七年(一九七二年)です。工期十一年という大事業でした。蓼科山麓の湧水をば人造の女神湖を造成してそこに落とす、そこから延々二十キロメートルほどの水路に流し、最後の難関として、望月町からはサイフォンの原理でこの台地に揚水して通水するに至つたのでした。この水道事業の完成を記念する石碑には、



と、眼下の急坂を駆け下りた先に千曲川が流れ、それに寄り添うように点在する集落とその彼方に佇立する浅間連峰の取り合わせの妙が、雄大にして情感豊かな光景を作っています。片方下りではないという意味ではぜんたい平かなのですが、台地の土は大いに起伏に富み、林と大小何百もの池が点在し、それぞれの丘陵の起伏のままに畑が耕され、思い通りの向きに畝がたてられています。ですから、畑のたおやかな稜線の向こうが、そのまま空とつながる地平線であつたり、木立の上、はるか北西の彼方に北アルプスの連峰が半透明に浮かび上がったいたりします。御牧ヶ原はこのような全方位に向かつて豊かな平線を持つ、空に近い高原です。

アア、ありがたきかなこの水と、あります。きつこの言葉以上にその喜びを伝えることはできないでしょう。

さて、このような状況での開拓でしたので、ひとの暮らしのためには強風を避けて沢伝いに家を建て、井戸を掘っては生活の用水に供しました。また水田・畑の灌漑のためにはため池を掘っては強粘土の地下から絞り出してくる水と天水とでもって水を溜め、これを沢伝いに作った田圃に落とし、それをまたその下の田に落とし、なけなしの水を大切に用いて来たのでした。

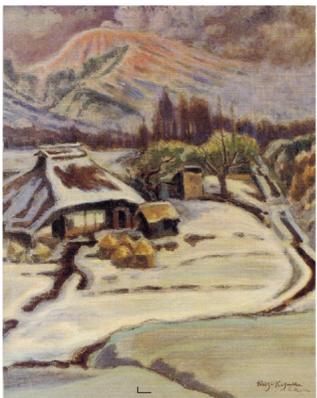
御牧ヶ原の風光は、実のところその苦勞と知恵が、天然の起伏に富み、水利に乏しい地形と相談し合つて作り上げられてきたものです。森とゆつたりとうねる丘の中腹の畑、そして沢沿いの田圃の織りなすバランスは絶妙で、そこを耕すひとの姿もすっかり風光にだけ込んで、生きる風景画になっています。

から、管理方法次第で、その自然は変わってしまう。御牧ヶ原でぼくの気に入ったため池は二カ所。一カ所は小諸市、もう一カ所はおとなりの東御市にあつた。そこは春に火入れをされ、秋に草刈りが行われる場所だった。くさはらの環境が保たれ、宿根草の多くは毎年花を咲かせる。初夏にはサワオグルマやアザミが咲き、秋にはサワヒドリやキキョウが咲く。これらのは花は昆虫たちに蜜や花粉を提供してくれる。昆虫たちに有用な植物は他にもたくさんあつた。例えばワレモコウやクサフジ、クララといった植物。ワレモコウはヒヨモントヨウの幼虫が食べる草だ。まだ御牧では見たことがないけれど絶滅が心配されているゴマシジミというチョウにもこの植物が必要だ。クサフジはやはり全国的に減つてしまつたヒメシロチョウが、そしてクララは今や長野県と九州の一部にしかいなくなつたオオルリシジミが卵を産む草だ。

海野和男

ある年の七月の末。六月末にはあれほど沢山の生き物がうごめいていたため池の畔は、無残にも真っ茶色になっていた。徹底的に草を刈つたらしい。それ以来、そのため池の畔は、だんだんと日本古来の植物が減つてきた。代わりに増えたのはススキなどの単子葉植物。そしてクサフジに代わつて外来のマメ科植物。たまごまんの活動と周期があつて生き残つていた植物やチョウはほとんどなくなつていった。

この素晴らしい御牧の自然を保つには、自然を形作る生きものたちがどんな暮らしをしているのかを知ることが重要だ。昆虫と植物は密接な関係を持つて暮らしてきた。そして人もまた自然が織りなす気候風土を理解して、共に暮らしていかなければならないのだと思う。



小山敬三画 御牧ヶ原より浅間を望む 1944年油彩キャンバス

*この絵を描いた場所は地図左下いちご平付近
この絵の展示場所
小山敬三美術館：小諸懐古園区
TEL:0267-22-3428

風が

風が吹く 風が吹くよ
スイカの電車 通り過ぎる 風が吹く
赤いベンチ 昼寝をしている 風が吹くよ
風が吹く 風が吹くよ
その角曲ればレストラン
風が吹く 風が吹くよ
スイカの電車 空を飛ぶよ 風が吹く
赤いベンチ 仕事をしする 風が吹くよ
風が吹く 風が吹くよ
その角曲ればレストラン

「ロバの音楽座」より



的でもあり、大陸的な響きを今に伝えているようです。渡来人達が、御牧ヶ原から一番近い山脈である浅間の連峰を騎上から望んで歌った姿が彷彿とします。

「望月の駒」考

望月の駒は信濃國十六牧のうちでも最も優勢で、信濃諸牧の馬を都へ引く駒牽は八月十五日に行われました。その駒牽が「望月の駒」という言葉とともに都大路での楽しみな年中行事として待たれていた事がこの歌からよく察せられます。

「千曲川のスケッチ」考

「地久節には私は二三の同僚と一緒に



右は、島崎藤村の『千曲川のスケッチ』のうち、印象的な冒頭の一節です。藤村は小諸義塾の塾長木村熊二に請われてその国語科の教師として小諸に赴任し、この地にて青春の年月を六年間過ごしました。そしてこの地に抒情派詩人から自然派作家へと変身を遂げたのですが、このエッセイ『千曲川のスケッチ』は、その転機をきっかけを作る重要な作品です。藤村が小諸時代に願つたように当時の御牧ヶ原の光景が、「小松の多い丘の上」と簡素に一言で語られているのも、彼自身の当時の心情と思

い合わせて印象的です。